法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-26

「南花有情」 : 中村哲先生の思い出

梅木, 哲人 / UMEKI, Tetsuto

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究
(巻 / Volume)
31
(開始ページ / Start Page)
280
(終了ページ / End Page)
281
(発行年 / Year)
2004-08-10
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002742

Hosei University Repository

「南花有情」 ―中村哲先生の思い出―

梅木　哲人（志學館大学教授）

私が先生のお近くにいる機会に恵まれたのは、ひとえに法政大学沖縄文化研究所のおかげである。とくに、平成二年の科学研究費補助金（国際学術研究）を得て行われた「中国福建省・琉球列島交渉史の研究」に参加させていただいたことで、毎日を間近なところでご一緒させていただいたこともあり、このときの先生のことが強い印象として残っている。

この研究では、中琉関係の基本的なことを知るために、最初に参加している研究者のほぼ全員で琉球使節の故地を尋ねるとともに、中国側の研究者の方々との交流が計画されたのであるが、その調査団の団長を務められたのが中村先生であった。調査団は同年一二月末に日本を発ち、先ず上海に飛び、更に廈門に飛び、そこから泉州、福州へと北上し、琉球館跡、琉球人墓地など福州市内外の故地を尋ねたのである。そして、その間に福州の先生方との交流が行われたのだが、「南花有情」とはそのとき中村先生から福州の劉恵孫先生に贈られた色紙に書かれた言葉である。私たちもその色紙を事前に拝見させていただいていたのであるが、そこには前日、先生が調査の途中手折られたブーゲンビリアの一枝が鮮やかに描かれ、絵の横にその文字が記されていたのである。劉先生からは書が贈られたと記憶している。調査の途中の道ばたで何気なく手折られた一枝を描かれるというお気持ちといい、そしてその絵に添えられた言葉の何気なさといい、中村先生の純粋なお気持ちをかいま見る思いであった。先生の絵や書については良く知られているところであるので、どなたかがお記しになることでしょうが、私には、高名な文人どおしが、このような何気ない形で深い交わりを結ばれるお姿を拝見し、非常に感動するところがあったのである。

この調査団は、福州のあと杭州、蘇州を経て上海にゆきそこから帰国の途についたのであるが、全行程合わせると一七日間に及んでいたので、途中色々なことがあり、驚いたりおかしかったりすることがいくつもあった。しかし、そのときに付けていたメモが、引っ越しの際どこかに紛れてしまい見つけることが出来ない。調査中の中村先生のお姿を具体的に記すことが出来なくて残念である。記憶の中にはいくつかの場面が思い出されるが、一番強く印象に残っていることが上に記したことである。

空を飛ぶサシバの目から見る日本列島から琉球列島へのつながりを語られるお言葉、南中国の道ばたにあるほこらに描かれている鶴と松、アーチ形に似た水道橋に視線を注がれるお姿。先生の中ではすべてが一つのことであったのであろう。先生が法政大学に沖縄文化研究所をお作りになったお気持ちなど、常人には思いも及ばないが、その末席に連なっているものとして、今ほど先生のご指導を仰ぎたいときはない。合掌。